

特別講演

大坂の蘭学 解剖を中心に

酒井シヅ

順天堂大学

江戸時代、葉の町として長い歴史を誇る商都大坂は、蘭学の歴史では長崎の蘭学、江戸の蘭学とは異なる独自の発展をみせていた。

大坂の蘭学といえば、まず思い浮かぶのは緒方洪庵（一八一〇—一八六三）と適塾である。緒方洪庵は『病学通論』『扶氏経験遺訓』などを著し、適塾に若者が全国から入門したこと、福沢諭吉に代表される数多くの門人が、明治になって広い分野で活躍したこと、いまでも大阪大学の始まりとして適塾が保存されていることで、大坂の蘭学の代表格になっている。しかし、適塾が開業したのは天保九年（一八三八）と幕末に近い。大阪の蘭学はそれよりはるかに早くから始まっていた。

大坂の蘭学には異色の人物が登場する。その特異な人物の蘭学を目安に、大坂蘭学を四期に分けた。従って、個々の蘭学者は一期から二期まで通して活躍したり、あるいは二期から三期、四期まで続けて活躍している。しかし、各期にそれぞれの特徴がみられる。

第一期は大坂の学問の特徴である町人学者が活躍した時期である。第二期は本格的な蘭学が大坂に根付いた時期である。第三期は大坂で、大坂特有の人体解剖が行われた時期である。第四期は大坂に全国から学徒が集まる蘭学塾が

存在した時期である。

第一期とは、木村兼葭堂（一七三六—一八〇二）が活躍した時代からはじまる。それは江戸で杉田玄白等が『解体新書』を翻訳していたときである。木村兼葭堂は西洋文物に興味を持ち、財に任せて様々なものを集めた。「兼葭堂コレクション」と呼ばれたものである。

木村兼葭堂は名を孔恭といい、号を巽斎、兼葭堂といった。大坂北堀江瓶橋北詰の造り酒屋と仕舞多屋を兼ねる商家の長子として生まれ、坪井屋吉右衛門の名を世襲していた。本草物産に興味をもって小野蘭山（一七二九—一八一〇）に師事。博物学者、本草学者、蔵書家で名を知られ、オランダ語、ラテン語を解し、大坂を訪れる文人のほとんどが兼葭堂と交流があったことが「木村兼葭堂日記」で広く知られる。このように大坂の蘭学は好事家の町人の趣味と旺盛な好奇心から始まった。

同時代の注目すべきことは、大坂の富商たちの手になる学問所「懐徳堂」を中心に西洋医学の関心をもつ人物が現れたことである。

懐徳堂の盟主中井履軒（一七三一—一八一七）のもとで、麻田剛立（一七四三—一七九九）が蘭学、天文学を教え続けた。麻田剛立自身、独学で蘭学を学び、明和九年（一七七二）に動物を解剖して記録に残した。それを翌安永二年（一七七三）に中井履軒が『越俎弄筆』と題する一書にまとめている。これが大坂蘭学が世に出した最初の解剖書である。『解体新書』が出版される前年のことであった。中井履軒は儒者であったが、その著作に『顕微鏡記』（天明元年）がある。

麻田剛立は本名を綾部妥彰といい、豊後杵築出身で杵築藩の藩医であったが、学問に熱中して、致仕を申し出たが、許されず、遂に意を決して脱藩して大阪に出て、姓を麻田、名を剛立と改めた。懐徳堂の中井竹山・履軒兄弟の助け

を受けて、医を業としながら天文学の研鑽を積み、壊徳堂で蘭学、曆学を教えていたのであった。

麻田剛立の弟子のなかに町人学者間重富（一七五六—一八一六）と山片蟠桃（一七四八—一八二二）、高橋至時（一七〇四—一八〇四）がいた。いずれも大坂を代表する町人学者として名を後世に残している。裕福な質商であった間重富はのちに橋本宗吉を経済的に援助して、大坂蘭学を興したことで知られる。

壊徳堂で麻田剛立から蘭学、曆学を学んだ間重富と高橋至時とともに麻田流新曆学を極めて、曆学研究で世に知られ、幕府の曆学御用に任命されている。

一方、大坂に住んで、蘭学をはじめ学問に専心した町人学者は山片播桃であった。播桃は両替屋の番頭を勤めながら、壊徳堂に学び、「夢の代」を著した。「夢の代」は、享和二年（一八〇二）から文政三年（一八二〇）の一九年を費やした大作で、天文・地理・制度・経済など一二巻からなる。この中で地動説も述べている。西洋科学を学んで、合理主義に徹した蟠桃は、辞世の句に「地獄なし極楽もなし我もなし ただ有る物は人と万物 神ほとけ化物もなし世の中に 奇妙不思議のことなほなし」と詠んでいる。

大坂蘭学の第二期は、播桃より一五歳年下の橋本宗吉（一七六三—一八三六）と斎藤方策（一七七一—一八四九）が本格的な蘭学をはじめた時代である。江戸で、大槻玄沢のもとで蘭学を学んできた小石元俊が、天明八年（一七七八）の京都の大火で家を焼失したため大坂に移住、そこで開いた家塾に橋本宗吉が入門。蘭学の手ほどきをうけたが、元俊は宗吉の優れた素質を見込んで、寛政元年（一七八九）、宗吉に江戸で大槻玄沢に蘭学を学ぶことをすすめた。傘工の家に生まれた宗吉には江戸に出かけるゆとりがない。元俊は、間重富に計って資金援助してもらって宗吉を大槻玄沢のもとへ遣り、蘭学を本格的に学ばせた。宗吉は卓抜した記憶力でオランダ語を習得して、大坂に戻って活躍する。小石元俊が京都に去ったあと、蘭学塾絲漢堂を開いて、大坂に江戸の蘭学を継いだ本格的な蘭学を興したの

である。宗吉は蘭書の翻訳、エレキテルの開発、人体解剖などに名を残している。

小石元俊の蘭学塾に橋本宗吉とほぼ同じ頃に入門したのが斎藤方策であった。方策は周防国一本松に生まれ、一九歳で大阪に出てきてすぐ小石元俊に入門した。斎藤は小石から蘭学だけでなく、漢方も学び、漢蘭折衷医として修行をかさね、藍塾を開業して盛名を得た。寛政の末頃、小石のすすめで江戸に行き、大槻玄沢に蘭学を学んで帰坂。文政五年（一八二二）に訳書『王函・把爾翁湮（ヨハン・パルヘイン）解剖図』を中天游と共著で出している。なお、小石家には『王函・把爾翁湮（ヨハン・パルヘイン）解剖図』の原稿が残る。この銅板図を彫った中伊三郎は斎藤の推薦で、大槻玄沢の『重訂解体新書』の図版の銅板図を作った。

「把爾翁湮解剖図」を斎藤方策と共訳した中天游（一七八三—一八三五）は丹後の出身で、文化二年（一八〇五）に江戸で大槻玄沢に学び、長崎、京都と遊学し、海上随陽に蘭学を学び、大坂で開業した蘭方医であった。中天游には訳著が多かった。斎藤方策の藍塾が近く、交流を重ねているうちに解剖書の翻訳が実現したのである。なお、緒方洪庵は大阪に出てきた当初、師事したのが中天游であった。

寛政年間、大坂では解剖が再三行われていた。大坂蘭学第三期である。解剖を行ったひとり伏屋素狄（一七四九—一八一）も町人学者であった。かれの解剖の記録『和蘭医話』（文化二年）は異色の解剖生理学書である。伏屋素狄の家は和泉国池田郷万町の庄屋であった。素狄は河内国日置荘の大庄屋吉村家に生まれ、長じて伏屋分家をついで、通称を万町権之進、号を琴坂といった。れつきとした町人学者である。二〇歳頃から医学を学び初め、漢方医として開業しているが、五〇代になると、蘭学を学び始めて、解剖を行い、『和蘭医話』を書き残した。これには大坂町人に特有の実践的、実験をした解剖記録である。この解剖には橋本宗吉、斎藤方策、大矢尚斎、中川元吾が参加した。素狄は橋本宗吉を義弟と呼んでいる。

ついで注目されるのが、大矢尚斎（一七六五—一八二六）が残した女屍解剖絵巻である。寛政一二年（一八〇〇）閏四月に大坂葭島で三七歳の女屍を解剖して、絵巻に著した。この解剖には伏屋素狄、各務文献が参加している。大矢尚斎（名が允、字が執中、号が尚斎）は産科医であった。解剖絵巻にはこの解剖でさまざまな知識を実験で確かめた様子が描かれている。尚斎が実験に使ったさまざまな器具は尚斎が工夫考案したものであった。尚斎には『産科やしない草』（安永六年刊）がある。

野呂天然（一七六四—一八三四）は伊勢の出の武士であったが、浪人の生活を強いられた。日夜和漢洋の書物を読み、動物解剖、刑屍体の解剖に参加して、ついに独自の解剖書『生象止観』などを著したが、この時期に大坂に住んでいた。各務文献（一七五四—一八一九）ははじめ産科を修め、のちに整骨医として活躍した。『整骨新書』を著し、木骨作製で有名である。寛政一二年（一八〇〇）大坂葭島の刑場で拾ってきた骨で骨関節など研究をしている。

中川元吾（生没不明）は大坂中之島で内科を開業していた医師である。儒学を懐徳堂の中井竹山に学び、医学を小石元俊に修学した人であった。解剖を得意としたのであろう。小石元俊の都督で行われた解剖（「施薬院男体臓図」）で執刀者になっている。

ところで、大坂での人体解剖がいつ始まったのだろうか、京都の柚木太淳（一八一八—一八〇三）の『解体瑣言』（寛政一一年刊）の序文によると、大坂で伏屋素狄の家で蘭学者とあつて話す内に、大坂の解剖に話しが及ぶと、寛政一一年以前に大坂では淡輪元潜、古林尚剛によって解剖が行われていたことが話題になった。二人とも漢方医である。

大坂蘭学の第四期は緒方洪庵に代表される時代である。この時期は適塾が始まった天保九年（一八三八）頃からである。この時期に大坂蘭学も蘭学から洋学の時代へと移り、明治に入ってボードインを迎えて始まった本格的な西洋医学教育に続いた。